大学図書館の役割り

商経学部部長　**堀田　和宏**

もうかれこれ10数年前になるであろうか。アメリカの某大学の研究機関誌に「NO Book NO Teacher Age」がくるという主旨の論文があった。コンピュータを軸とした情報革命の進展によって、教育に関して少くとも教育制度や教育方法の変革が必至であることを説いていたものである。

大学や高等教育機関の数を誇るわが国においても、さらにいわゆる情報化時代に乗っかった「放送大学」がつくり出された。居ながらにして自動的に視て聴くことができ、これによって教育が受けられる。場合によっては、同時に異なった講義を視たり聴いたりすることも可能となった。情報はそれ自体が一つの教育ではあるが、いまや教育が情報化されてきたのである。教育のプログラム化の現象である。

本来の大学教育の機能的あり方は、教育を受けるものが、自分から求め、自分で考え、自分を創ることに生きるよう意図的にそういう場を作り出してゆくことであろう。大学は、自分は何をすべきか、自分は何をしたいのか、それにはどうすればよいのか、はたしてそれはできるのか、といったことを学生に自ら学ばせるところである。できうるかぎりプログラム化されない教育が理想である。

大学図書館の機能の本質はまさにここにある。学生が自ら求め、自ら考え、自ら選択し自らを創造する行動は「自分で探し」「自分で読む」ことを媒介にしなければならない。情報化社会では、情報は一般化し共有財産になるかのような錯覚があるが、ことはむろんそうではない。情報に正しく適時にアクセスするかどうかによってむしろ選別がなされ個別化がすすむ。情報が一般化しまた多量になれば、パースペクティブ、意志、評価、選択の「個性」がより一層重要となる。図書館は文字通り大学の中枢の知的情報機能であるが、それは、産業活動や一般社会で用いるＶＡＮやキャプテンのような機能であってはならないであろう。少くとも学生教育においては、図書館はプログラム化されすぎてはならない。学生に自ら読ませ自ら学ばせる機能を「処理の便宜や迅速さ」に侵されてはならないからである。